

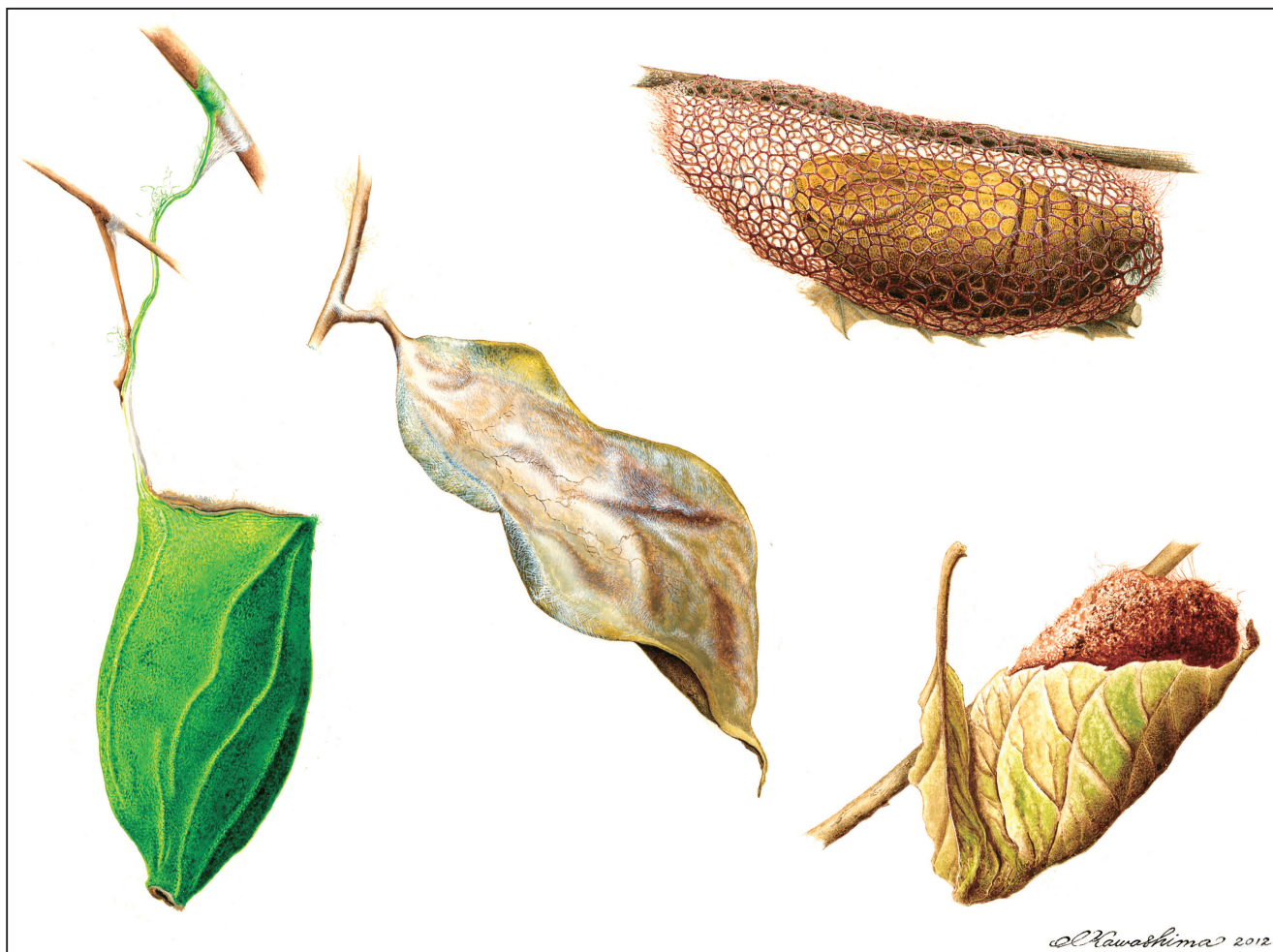
自然科学のとびら

Newsletter of the Kanagawa Prefectural Museum of Natural History

Vol. 18, No. 3

神奈川県立生命の星・地球博物館

Sept., 2012



糸の造形「繭」

クスサン *Saturnia japonica japonica* (右上)

ウスタビガ *Rhodinia fugax fugax* (左)

シンジュサン *Samia cynthia pryeri* (中)

オオミズアオ *Actias aliena aliena* (右下)

2012 年 1 月 川島逸郎 制作

かわしまいつろう
川島逸郎 (学芸員)

昆虫には、^{ようき}蛹期を迎えるにあたって繭を^{まゆ}紡ぐものが多いです。繭には、蛹自体を外敵から保護するだけでなく、紫外線を防ぐといった効果があるようです。色彩や形状は種ごとに特徴的ですが、それが特に顕著なヤマユガ科の 4 種を取り上げてみました。

クスサンの繭は「透かし俵」の古い呼び名の通り、目の粗い網目状なので中の蛹が透けて見えます。幼虫から取るテグスは有名ですが、この繭からも紡績が行われていました。ウスタビガの繭は珍しく色鮮やかで、形も独特です。羽化途上の新成虫は、糸を溶かす液を口から出して繭に

孔を開けますが、この繭は、その孔は最初から上端に一直線に開いているほか、下端にも必ず小さな円い孔が開けられています。葉面をうまく利用するのはシンジュサン。葉の表面に糸を吐きかけながら袋を作り、決して自身単独で作り上げることはしません。^{ようへい}葉柄の部分は、枝のほうから糸を巻きつけて念入りに固定します。オオミズアオは、和紙のような肌触りの繭を紡ぎます。この種だけは蛹で越冬し、年に二回羽化します。春に出る成虫は蛹で越冬したのですが、越冬する繭は地表や地面近くで落ち葉を巻き、夏に出るものは、樹上の枝で生葉を巻きつけます。